

礼拝における私たちの祈りは誰のために、あるいは何のために献げられているのでしょうか。しばしば自分自身や教会の関心事のために献げられているのではないのでしょうか。著者は礼拝において1節で全ての人々のための祈り、2節で支配者のための祈りが勧められています。1節では教会の集まりにおける祈りに関して全ての人々のための祈りが最も重要であると言っています。また、支配者のための祈りの目的は支配者たちの回心ではなく、私たちが常に信心と品位を保ち、平穏で落ち着いた生活を送ることだと言っています。著者が特に支配者たちのための祈りに言及するのは、彼らから直接に保護や特権を期待するからではなく、国の安寧と繁栄が信仰生活の理念の実現の前提をなすと考えたからだと思われる。このような理由付けは牧会書簡特有のもので、今日ではこのような理由付けは難しく、支配者たちのための祈りの目的は支配者や高い地位にある人が、イエスが示された人々が皆平和のもとに一人一人の存在と生が尊重され、人間らしく暮らせるような世界にするように考え、実行するように願うことではないかと思うのです。3~7節は1節の勧めの根拠を示しています。4節には全ての人々のために祈らなければならない理由が示されています。「真理を知る」とはキリスト教への回心を意味しています。それは神さまが特定の人々だけではなく全ての人々が救われることを望まれるからだと言っています。牧会書簡では、神さまは、しばしば「救い主」と呼ばれています。5~6節はキリスト教的信仰の基本的教えで、おそらく初代教会において洗礼を受けた時の信仰宣言の一節であっただろうと考えられています。ここでもすべての人が重視されています。マコ 10:45 のイエスの言葉が反映されているものと思われる。

著者は、他者のために祈ることは教会が「まず第一に」なすべき務めである言っています。教会は自分自身のためばかりではなく、自分の愛する人々ばかりでもなく、信仰によって結ばれている人々ばかりでもなく、あるいは友人や同じ意見を抱いている人ばかりでもなく、自分を憎み、敵対する人々のためにも、他の宗教を信じる人のためにも祈るべきなのです。なぜなら教会は自分自身のためだけでなく、この世界のためにも存在しているからです。著名な神学者バルトは「教会の中で祈る者は、万人の上にあります一人の主のもとで、兄弟らと共に、兄弟らのために祈るのであり、またすべての人間のために、神の前にある全人類と世界のために祈るのである。このところで、個々人の祈りは真実の普遍的性格を与えられている」と述べています。